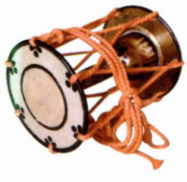
相愛学園 学園長◆インド古典舞踊家
大谷紀美子氏に聞く

―白山に 自然に そして美しく!―

大阪にある浄土真宗の宗門学校、相愛学園の学園長、大谷紀美子氏は、この度新しく西本願寺第二五代門主になられた大谷光淳師の伯母に当たられる。氏は学園長であるとともに民族音楽・舞踊研究の第一人者そしてインド古典舞踊の先駆者、しかも今も尚現役でいらっしゃる。そのグローバルかつ新しい分野での研究のエピソード、そしてその軌跡をお聞きした。

●民族音楽学を学ばれた理由は何ですか?

まず大学に入る時、ピアニストにはなれそうな感じでなかったので…そうしたらピアノを習っていた先生が音楽学という学問があるから音楽の実践と研究ができるとおっしゃったんです。丁度その頃小泉文夫という有名な民族音楽学者がおられまして、インドに留学され帰国後、東京芸術大学で教えておられました。東京へ行けばインド音楽の研究もできると言われ、桐朋学園大学に入学しました。そして卒論を書く際、分野を決めないといけなくなり、非常勤講師として桐朋に来ておられた小泉先生にご相談し、インドの音楽を研究してみたいと言いました。先生は「西洋音楽を研究している人は大勢いるので、人がやった後をお掃除して歩くみたいなものだし、もっともお掃除しているつもりが、汚して歩いているかも知れないが…。インド音楽研究ならほとんど誰もやっていないので、小さなことでも貢献できます」。そして「インドに



はさまざまな種類の音楽があるので、何の音楽にするかを決めないといけません」と言われました。小さい頃からダンスが好きだったので舞踊音楽にしますと答え、先生のご本などをお借りして卒論を書きました。その後、先生は「舞踊の音楽を研究するならインドで舞踊を習わないといけません」とおっしゃいました。後から聞いた話では。学生皆にそう言われていたようです。だけど実際に行くのは二十人に一人くらいしかいなかったそうです。私は当時どこかに留学したかったので喜んでその言葉に従いました。

インドの学校、カラークシェトラではバラタナーティヤムの実技を学びました。

カラークシェトラで撮影。
ジャヤラクシュミー先生（中央）、大谷氏（先生の左隣）

帰国後また相愛に戻りました。今度は先輩の研究者である相愛の先生たちが私を一人前の研究者に育てたいと思われたようで、「舞踊学の修士課程に行かないか」と言われました。私、試験のための勉強が苦手なのと、当時、日本には舞踊学を専攻出来る大学や大学院はありませんでした。どこか外国へ行かなければと思いました。その頃、民族舞踊学という科目のある大学はアメリカに二つか三つしかなく、その一つがハワイ大学でした。ハワイ大学大学院音楽学科舞踊学専攻というところで、修士を取得し、また相愛に戻りました。しかし五年以上同じ所に居ると頭がおかしくなりそうになる!?（笑）今度は博士課程に行こうと思い、長期休暇をとって行くわけにもいかず、辞表を出しました。

イギリス（連合王国）の北アイルランドのクイーンズ大学にジョン・ブラッキングという社会人類学が専門で舞踊や音楽の研究もされていた有名な先生がいらっしゃいました。そこへ行きました。六年間住んでいました。その当時はちょうど北アイルランド紛争の終わり頃でした。公共の建物に入る時はセキュリティチェックが必ずありました。でもそこに住んでいるとどこが危険かは判るので、巻き込まれることはありませんでした。私の近所で二度賭博のブッキングオフィスが襲撃されました。それとそんなに近くではないですが、大きな爆弾が軍の施設に仕掛けられたことがありました。友達と食事をしていたらドカーンと大きな音がして、ガラス窓がビリビリと震動しました。

日本に帰国後、高知大学の教育学部が音楽専修に修士課程を設置するため、音楽学の教授を公募していることを知り、応募、採用されました、八年間高知に居ました。高知大の定年退職間近に、相愛大の旧知の小野功龍先生に呼び出され、どこかでごちそうになりながら「又、相愛に戻りませんか」と説得され、帰ってきました。

クイーンズ大学学位授与式に撮影

●先生はインド古典舞踊をかなり早い時期に学ばれましたね？

一九六十年代、同じ頃に日本人では一人か二人くらいだったと。京都にヴァサンタマラ舞踊研究所があります。舞踊家のシャクティさんのお母さんが設立された研究所ですが、ヴァサンタマラさんは私より少し早く舞踊を始められたと思います。お母さんがインドで学ばれ、シャクティさんに古典の基本の手ほどきをされました。

●先生の学ばれたインド古典舞踊は？

インドは広いですから昔はそれぞれの地域に特色のある舞踊が伝承されていました。私が専門とするバラタナーティヤムは、インド南東部で生まれ育った舞踊です。ヒンドゥー教の寺院で巫女のような立場の女性が踊っていた舞踊と、マハラジャの宮廷で王様を称える舞踊とが原点です。十九世紀、舞踊教師と音楽家の四人の兄弟、「タンジョール・カルテット」

と呼ばれる兄弟がそれ迄伝えられて来た舞踊を改編し、形を整え、新しい作品を数多く創りました。

二十世紀になりご存知のようにイギリスの統治から独立しようという運動が起こりました。独立運動を支えていた人達の多くは、イギリスに留学した人たちです。その人達は十九世紀初めから二十世紀初めのイギリスで、ビクトリア朝の倫理道徳を身につけて帰ってきました。その人たちからすると、当時のインドの舞踊の内容や舞踊を伝承していた女性達の生き方は許せないものでした。そして、政府は「巫女の制度」と寺院での舞踊活動を法律で禁止しました。

しかし、独立運動に拘わった人の中から、イギリス色を取り除き、インド古来の伝統を復活しようという運動が起こり、舞踊もその一つのシンボルとして取り上げられました。

私が通ったカラークシェトラ芸術学校（現在は大学）を作ったルクミニー・デヴィもその一人です。彼女はある時、有名なロシアのバレエ・ダンサー、アンナ・パブロバに出会い、「バレエを習いたい」と頼みました。「あなたの国には素晴らしい伝統的な舞踊があるでしょう」と逆に言われたそうです。彼女はインドに帰り学校を設立し、地方で細々と舞踊を教えていた先生たちを探し出し、教師として招きました。そして舞踊の改革・復興活動を始めました。昔から伝わっている作品でも、エロティックな表現のものはいけないなど彼女なりの考えにそって、又西洋の舞踊教育の方法論も参考にし、システム化された舞踊教育法を編み出し、学校制度の中で舞踊教育を始めました。それがカラークシェトラです。この舞踊のことを、しばしば千年の伝統があると言われますが、十九世紀に大改革が行われ、それからまた一九三十年、四十年代にさらに大きな改革が行われ、バラタナーティヤムと命名され新しい舞踊が誕生したと言えるでしょう。

●宗教と舞踊・音楽の関係についてお伺いしたいですが

私が踊るバラタナーティヤムというのは、歌詞のある音楽がついている作品の場合、百パーセントと言っていいくらいヒンドゥー教の神様を題材にしています。だけど神様といっても大変人間的な面をもっています。例えばクリシュナという神様、インドで大人気の神様ですが、子供の時はいたずらっ子、その後大変美しい若者に成長し、女性たちのあこがれ、慕われる存在となり、大勢の若い女性と遊び戯れます。インドの人はそんな風に神様を捉えているけれども、神様として崇拝、尊敬もしています。人間とは異なる存在です。でも、とっても身近な存在です。以前、インドの舞踊家に彼女が踊ったあとで「あの踊りは素晴らしかった」と感想を伝えました。すると彼女は「そこに神様の存在を感じていた」と言いました。そういう風に感じられるのは、小さい頃から神様として信仰しているからなのかもしれません。

●今、日本では宗教が生活の場からなくなってきていると思われるのですが

でも一方でオウム真理教みたいなところに傾倒していく若者があります。又占いが流行りパワースポットを訪ねる人たちもあります。それもある種宗教的なものかなと思います。私は若い人たちにそっちの方へは行って欲しくありません。既存の宗教が若者を惹き付けるような魅力ある伝え方をして欲しいです。

私は踊りや音楽を何かの手段に利用するのは好きではありません。お寺でコンサートやって、それが人集めの一つの要素になり、来られた方々が仏教のお話も聴いて帰られるのはいいと思います。

私の場合、神様の話を踊っているのは日本に例えれば『古事記』のような物語や神話を舞踊という手段で伝えるためです。私が踊り伝えたことでヒンドゥー教の信者になって欲しいとは思いません。私は純粋に舞台舞踊、芸術舞踊として接しています。

●相愛学園長としてはいかがですか?

少子化で学生数が減っていますが、伝統ある学園、音楽教育を始めたのも古いですしもちろん発展して欲しいと思っています。相愛には思いやりのある優しい学生が多いです。宗教的雰囲気の中で育っているからなのかなと思います。特に中学・高校の六年間、相愛に通った卒業生たちは、特定の宗教や宗派に深く関わらなくても、なんとなく人間形成ができているように思われ、それはやっぱり宗教教育の成果の一つだと思います。入学式・卒業式の前に簡単な法要が行われる、そういう雰囲気の中で育っていくというのは相愛の特徴として良いことだと思います。アメリカ人の友達が言っていたのですが、親しかった異性の友人と別れて悲しくてしょうがなかった時、彼女はキリスト教信者ではないけれど。教会に行ってじっと座っていたら自分の気持ちが落ち着いていったそうです。キリスト教、仏教を問わず、宗教やその施設にはそういう雰囲気や側面があるのでしょう。

昨今、行き場がなくなった若者が多いです。どこにいても監視され、あるいは管理されていて、そういうような人達が、少しのんびり出来る安らぎの場所としてお寺があっていいと思います。宗教教育が根底にある学校教育というのは、ここに入ってきたから信者が一人増えるというのではなく、これからの人間形成に役に立つという風に考えたいと思っています。

学生にとって四年間、落ち着ける場所であり、その上で希望する資格が取れるような場所であって欲しいです。相愛大生、皆のんびりしすぎているかも(笑)

PROFILE

大谷 紀美子 おおたに きみこ

西本願寺前々門主大谷光照の次女として生まれる。桐朋学園大学で民族音楽学を学び、その後ハワイ大学やクイーンズ大学ベルファストへと留学し民族舞踊学や社会人類学を学ぶ。1966年から68年までチェンナイ市にあるカラークシェトラ芸術大学でインド古典舞踊バラタナーティヤムを学び、以降日本やイギリス、アメリカ合衆国などで公演を行う。高知大学教育学部教授を経て、現在は相愛学園学園長および相愛大学客員教授。

相愛学園　沿革

明治二十一(1888)年、大阪市本町、津村別院(北御堂)の境内地に相愛女学校として創立される。初代校長は大谷朴子(西本願寺第二一代門主明如の妹)。明治三九年には相愛高等女学校と改称、大阪女子音楽学校増設するなど女子教育、音楽教育に力を注ぐ。校名の「相愛」は『仏説無量寿経』にある「世間の人民、父子・兄弟・夫婦・家室・中外の親属、まさに敬愛(きょうあい)して憎嫉(ぞうしつ)することなかるべし」の『當相敬愛』に由来する。

現在、相愛学園は相愛大学(大阪市南港)相愛中学校・高等学校(大阪市本町)を有し親鸞聖人の教えを根底に据え、一〇〇年以上にわたり存続し発展し続けている。

相愛学園
SOAI Gakuen

Dharma 法 Message 話

海外からのダルマメッセージ

from Overseas

「マインドフルネス瞑想のブーム」

ケネス 田中師

1947年山口県生まれ。1958年日系二世の両親と渡米。
カリフォルニア・シリコンバレーで育つ。スタンフォード大学卒、東京大学（修士）、カリフォニア大学（博士）。現在、武蔵野大学教授・仏教文化研究所所長、国際真宗学会会長、日本仏教心理学会会長。
著書に、『真宗入門』（法蔵館）、『アメリカ仏教』（武蔵野大学出版会）など。

多くのアメリカ人が仏教に惹かれる最大の理由は、メディテーション（瞑想）である。彼らにとって、仏教とは「日常の目覚め」を実現させてくれる営みであり、葬式や墓地などとはほとんど関係ない。仏教とは、教会で主に説教を聞くという従来の「信じる宗教」とは異なり、自らが瞑想という実践を行う「目覚める宗教」として見られている。

近年、日本でもマインドルネス瞑想（mindfulness meditation）への関心が高まっている。それを象徴するかのように、二〇一三年に早稲田大学を本部とする「日本マインドフルネス学会」が創設された。その際、米国から、ジョン・カバットジン（John Kabit-Zinn）という科学者を招いていた。彼は一九七九年に、マインドフルネスという瞑想法を東南アジア系の仏教団体で学び、それをマサチューセッツ州大学の医学部内でマインドフルネスを中心としたクリニックを始めた。つまり、マインドフルネスの瞑想法を宗教の枠から取り出し、医療の分野でストレス軽減法として活用したのである。

今やアメリカでは、毎日、全国で約二千万人もが健康のために、何らかの種類の瞑想を行なうそうである。瞑想の中でも最も人気であるマインドフルネス瞑想関連の費用として、二〇〇九年には、四十二億ドル（約四千八百三十億円）が遣われたそうである。そして、このマインドフルネス瞑想は、医療だけでなく、心理療法、教育、福祉、産業、軍隊、スポーツなどの様々な分野で採用されている。更にストレス軽減以外に、集中力、免疫力、鬱の再発防止等にも有効という科学的論文が多数あり、米国社会では爆発的な人気となっている。

人気の具体例として、私の次男の嫁サンディ(Sandi)の例を挙げよう。彼女は、カリフォルニア州の私立小学校で一年生担当の教員をしている。サンディは、二十名の子供たちに、毎日昼休みの直後に必ずマインドフルネス瞑想を数分させている。子供達は教室に敷かれているじゅうたんの上で、足を組み目を瞑って喜んで参加するそうである。その時間以外でも、子供達の感情が高ぶり過ぎたり落ち着きを失ったりした時もマインドフネスを導入している。その結果、集中力（focus）、自己へ気づき（self-awareness）、落ち着き（calm）、同情性（empathy）、感情のコントロール（impulse control）の向上という良い教育効果が出ていると、彼女はマインドフルネス効果を賞讃する。このような成果も出ていて、学校側も保護者たちも、サンディがマインドフルネス指導の講座を定期的に受けることも後押してくれている。

このように、マインドフルネス・ブームは仏教の枠を超えていっているので、仏教徒の間では、マインドフルネスの仏教色が弱まっていくことに懸念を示す者も少なくない。しかし私は長い目で見ると、マインドフルネス瞑想はアメリカ社会への浸透を促進する役目を果たすことになり、アメリカでの仏教の存在感を高めてくれると確信している。

家族の誰かが亡くなりました。病院から自宅や葬儀会館などにご遺体が搬送されて、枕勤め（臨終勤行）が行われます。そのとき一本線香が立てられていたりします。葬儀のときも、葬儀社の担当者が香炉に一本線香を立てます。

真宗では「一本線香を立てません」「線香は立てません」と注意します。なぜでしょうか。「真宗では……」と言われても、その理由が分かりません。真宗以外の宗派では、葬儀の一本線香や普段のお参りで仏壇の香炉に線香を立てることが一般的です。

問題は「一本」と「線香を立てる、たてない」ということです。

習わしを科学する

一本線香はいけないのか

香とは

まず、どうして真宗は線香を立てないのか、ということからお話しします。

浄土真宗の門徒が焼香するとき、普段、香炉の大きさに合わせて線香は折って横にします。沈香など粉末の香（抹香）を用いて焼香するとき、抹香を置く回数ですが、本願寺派は1回、大谷派は2回です。香をわざわざ頂いたりはしません。

一本線香

線香とは何か、そもそも香とは何でしょうか。もともと香は、伽羅・白檀・沈香といったかおりのよい香木を細かく削ったもの、あるいは榕や馬酔木などの樹皮・葉を乾燥させて粉末にしたものでした。これに火を付けて燃やすことを「香を焚く」「燃香」といいます。一方、線香は、杉の葉・椨の樹皮に香料を混ぜて練り、棒状に成型したものです。線香は、香りを長く出すために工夫されたものでした。時間の長さを測る「時香」もあります。東大寺修二会の行事に、いまも使われています。

本来、香は焚くものであって「立てる」ものではありませんでした。あるいは「塗香」といって、法要の始まる前、香を口に含んだり身体に塗ったりするものでした。

葬儀の時、「死者が迷わないように火を絶やしてはいけない」ということも言われましたが、真宗はこうした俗信も否定したのでしょう。

「一本」の民俗

日本人は「一本」に特別な心意を持っていました。葬儀の時には一本線香だけでなく、榕を用いて一本花です。枕飯の習俗はなくなってしまいましたが、死者の茶碗に一膳飯を盛り、箸を一本にみえるように突き刺しました。普段、一本箸で食べてはいけない、と注意されたものです。

現代の案山子は、人間の格好で二本足ですが、昔は「一本足の案山子」でした。天狗のイメージは鼻高と一本歯の下駄を履いています。そういえば、ゲゲゲの鬼太郎も一本歯の下駄です。

「一本」は、通常ではない特別なコトと時間、常人ではない人間にあらざる人、という意味が込められていました。三重県四日市市の神社で、年初の粥占神事を見学したことがありました。粥を女竹と一緒に煮て、竹筒の中に入った米粒で年の豊凶を占うという行事です。最後に残った粥を、竹の一本箸で食べた記憶があります。それは「神コト」の行為であったからです。

仏教では、死ぬことは特別なことではありません。人間は生まれてきたから死ぬものであり、生あるものは必ず死ぬという道理です。死は自然の理です。

焼香は一回か二回か、線香は立てるのか、立てないのか、どちらが正しいのか、まちがっているのか、などとこだわることはありません。それぞれの「作法」ということでいいかと思います。香は仏に対しての荘厳であり、法要の場を清浄にするものです。

一本箸で食べる
三重県四日市市

蒲池 勢至師（がまいけ せいし）
1951年生まれ
真宗大谷派長善寺前住職、同朋大学特任教授

主な著書
『真宗と民俗信仰』（吉川弘文館）、『真宗民俗の再発見』（法藏館）、『民衆宗教を探る 阿弥陀信仰』（慶友社）、『太子信仰』（編著・雄山閣）、「真宗民俗史論」（法藏館）」

仏教を身近にする伝道誌 道標 2017年夏 | 特別号 | 2017年7月1日発行 発行所／浄土真宗を広める会 萬福寺内 大阪市西区靭堀江1-14-23 tel.06-6531-1328 fax.06-6531-1327 e-mail ktda8.10@gmail.com

聞法（もんぽう）のひろば

お坊さんのつぶやき

『読者の皆さまからの投稿をお待ちしています。編集室まで』

仏教会が『花まつり』を駅前で催している。ある年の三月、道路使用許可願いを持って警察に行った。受付の若い婦警さん、花まつりの文字を見るなり「花を売りはるんですね、露天商の許可ですね」ー鳴々ー近年神仏ぬきの祭りが多すぎる。何か大事な芯が一本抜けているように思う。

聖徳太子十七条憲法。「篤く三宝を敬え…すなわち四つの生まれ（生きとし生けるもの）の終わりの帰（よりどころ）それ三宝に帰（よ）りまつらずは、何をもってか枉（まが）れるを直（ただ）さん」と

会田雄次先生の話を思い出す。ヨーロッパから来られた先生方を自宅で接待すると皆さん同じ感想を述べられる。一、日本のお年寄りは世界一幸せでうらやましい。二、仏様神様と何と仲良く暮らしていることか。それこそ涙を流さんばかりの感激である。真意をはかりかねていたが、よく聞いてみるとお仏壇であった。日本のお年寄りは死んでから後までも孫に話しかけてもらっている。こんな幸せな老人が他の国にあるのか？　我々は生きている間でさえ孫と会って話が出来るのは一ヶ月にせいぜい十分だと…。

米国で少年犯罪の低年齢化が進んだとき、犯罪抑止力として日本の家族制度（三世代同居・有仏壇）を見習え！との提言があったと聞く。近代化の進んだ日本人の家庭は、それに応えるだけの力は疑問である。最近頻繁に報道される事件の内容は、残虐無慈悲で感情の受容の域を超えている。檀家へおまいりすると「これからどうなりますのやろ!?」との問いかけが多くなった。「手を合わす心を取り戻したいですね」と同意を表したら、「お寺さんにしっかりガンバッテもらわないと！」と返された。

ごもっともでございます。

（破閑人袋）

編集後記

相愛という学校、浄土真宗の宗門学校ではあるが大阪の人にとっては女子教育、音楽教育の学校として知られ、親しまれている学校である。私の関係でいうと母も相愛女学校の出身だし、叔父も驚くことだが『赤とんぼ』で有名なあの山田耕筰氏が戦前、相愛で教鞭を執っていた時期に声楽のレッスンを受けていたと聞く。

さて三年前、その元相愛大学学長であり願泉寺住職小野功龍師の葬儀に親族としてお参りさせていただいた。その時、弔辞を読まれたのが、学園長である大谷紀美子氏であった。「ご自身では気が付いておられないと思いますが功龍師はそれ以上の能力をお持ちで…」等なんとも不思議な言い回しで故人を讃えられていた。かえって生前の師の人柄をうまく言い当てておられたように私には思えた。そして後日、親しくさせてもらっているインド旅行社の方からその大谷氏が本願寺の大谷家の出身であること、そしてなんとインド舞踊家でいらっしゃることを聞きびっくりした。実は私の寺でも十年程インド舞踊の教室があったのである。

さて大谷氏へのインタビュー、やはり話されるそのお言葉、立ち振る舞いはなんとなく気品が漂い、自由で自然そして美しさを感じる方であった。ありがとうございました。

合掌

平成二十九年七月　編集室　石田克彦

あたたかい ご進物…

「献米」誕生

読者の皆様、ご存じの通り昨今の仏事の供養の方法は様々で、お葬式では、家族葬が主流になり、お仏壇では、洋風の現代式が主流になり、お祀り事が変化していく中、仏様へのご進物も変化してきています。

商品開発は、主婦のリサーチから始まりました。

「仏様へお供えする商品」

「たくさん頂いても嬉しい」

「宗派を考えなくて選べる」そんなご要望にお応えする「より喜ばれるご進物」をコンセプトに誕生したのが「御進物米」です。

「毎日お供えする、毎日頂く」

仏様への最高の供物「献米」は如何でしょう。

進物箱の中には、精米したての新鮮な魚沼産コシヒカリのお米を、一合ずつ真空パックにしており、六合用と八合用の二種類です。未開封の場合、精米日から一年は、美味しく召し上がっていただけるようです。

次はどのようなものが、お供え物になるのでしょうか？

株式会社 廣瀬佛檀店

〒543-0062 大阪府大阪市天王寺区逢阪2丁目1-12　四天王寺西門交差点 西へ30m

タウンページ　http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/（詳細地図あり）

0120-817065　☎06-6771-7007